

沢田内科医院 ニュースレター

第 133 号

コロナに翻弄された3年間、そして継承後4年目のはじまり

2020年(令和2年)4月、前院長美彦より沢田内科医院を継承して開業してから3年が経とうとしています。1000日以上にわたりひたすらコロナと戦い続けてきたこととなります。コロナワクチン接種も始まり、午後の休診時間も集団接種の時間にあてて対応しました。また、休日も夜間もできる限り発熱外来対応もしました。

数えてみたら2022年(令和4年)だけでも約8800件の発熱外来診療をしていました。3年間となると10000件は超えているはずです。もちろん当院だけが頑張ったわけではありませんが、それでもコロナに対して市内の一開業医としてやれることはやったのではないかと思っています。ボロボロになりながらついてきてくれた職員達にはとても感謝し

ています。

コロナが開業医の日常に残した傷跡はたくさんあります。第一はやはり職員の疲弊です。この間、体調を崩して辞めざるを得なかった職員が数名いました。患者さんを治療する職場で働いているのに患者さんをつくってしまったことは医師としてとても心苦しいことでした。辞めないまでも疲労蓄積により心に余裕がなくなってしまって、職員間の人間関係がぎくしゃくしたり、ミスが増えたりと弊害もたくさんありました。患者さんから窓口や電話での対応でお叱りを受けたことも一度や二度ではありません。疲れがたまって、笑顔が消えて、殺伐としてしまった医院を再生させていかななくてはなりません。



(澤田直也)

今後の医院運営

そして2月下旬には私自身もストレスからか体調を崩してしまいました。あるとき患者さんに検査結果を説明しているときにひどいめまいと吐き気、頭痛が出現し目を開けていられなくなってしまいました。急遽、出身医局である弘前大学医学部附属病院の消化器内科に依頼して代診の先生にきてもらいました。以前私がコロナになって診療できなくなったときにもきてくれた笹田先生(研修医時代にも1か月間地域医療研修として勉強にきていた先生です)、そして当院での診療ははじめての立田先生、館田先生には本当に助けてもらいました。

3日間休ませていただいている間に、鳴海病院やのだ眼科、あきた耳鼻科を受診し原因を調べることができました。大きな病院と違って、代わりがない

ければ多方面に迷惑がかかってしまいます。倒れないように体調管理をしていくのが一番ですが、倒れてしまったときにどうやっていくかも常に考えておかななくてはなりません。



先日2022年の出生数が80万人を割り込み、これまで一番少なかったと報道がありました。そして青森県の人口も毎年1万人ずつ減ってきています。働き手がどんどん少なくなり、仕事だけが今のまま残ると相対的に必ず忙しくなります。それを踏まえて「やれること」「やれないこと」「やらなくてはならないこと」「うちでやらなくても他でもできること」「当院でなければできないこと」を吟味し、職員の労働環境も考慮しながら今後どうやって医院を運営していかななくてはならないのかを考えました。

「やめることを決める」

今回のコロナ対応では次々に新しい変異ウイルスが出現し、短期間で大流行を繰り返すという形が繰り返り広げられたので、とにかく後手後手で対応せざるを得ない状況が3年間も続きました。そのため、とにかく無理を押し進めるというのが常態化し、ど

んどんつらくなってきたという背景があります。特に保健所にかかった負荷は相当なものだったと思われる、「もうこれ以上、無理なものは無理」と言い出せないつらさがあったと思います。

危機の時に踏ん張らなくてはならないのは医療機

関の宿命でもあります。それでも私たちにも生活がありますし、時間的にも体力的にも精神的にも限界があります。長期にわたり現在の医療の質を維持していくためには「やめることを決める」必要があると判断しました。



ないですし、日常業務に追われて最新の医療の勉強もままならず、不機嫌な対応をするような内科医にも診察して欲しくありません。困って医院に電話をしているにもかかわらず、冷たい対応をされるような医院にもかかりたくありません。コロナもいったん落ち着き、新年度が始まるタイミングだったので、その第1弾として「火曜午後の休診」と「大腸ポリープ切除をやめる」ことに決めました。

自分が患者の立場になったときに、夜間診療で疲弊して判断力が落ちた外科医には手術をして欲しく

6月1日から火曜午後も休診

沢田内科の歴史を紐解きますと診療時間の変更に関しては、平成20年4月に金曜の午後に休診にしたということがありました。2007年9月のニュースレターに詳しい経緯が書いてありましたが、おおよそ今の私が考えているのと同じような理由で時間を作る必要があったようです。当時もやはり患者さんにとって医院が開いている時間が短くなるデメリットについて触れられていました。

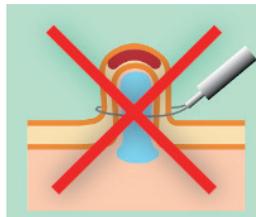
職員それぞれがレベルアップするための勉強の時間、看護師を超音波検査士として養成するための時間、充実した病歴要約(通院患者さんのこれまでの病気の経過や処方内容を1枚の紙にまとめたもの)を作る時間、今まで夜遅くまで残業してやっていた事務処理をする時間。そして、何より職員の心と健康を取り戻すための時間。

時間	月	火	水	木	金	土	日
9	診療	診療	診療	診療	診療	診療	休診
10							
11							
12							
1	昼休み	休診	休診	昼休み	休診	休診	
2	休診	休診	休診	休診	休診	休診	
3	診療	休診	休診	診療	休診	休診	
4	診療	休診	休診	診療	休診	休診	
5	診療	休診	休診	診療	休診	休診	

沢田内科で行われる医療の質を底上げするためには時間が必要でした。そのため休診の時間を増やすことにしました。

大腸ポリープ切除をやめる

これまで大腸ポリープは6~7mm以上の大きいものは癌化するおそれがあるので取る。小さいものは経過観察するという方針でした。それが近年変わってきています。最近では小さいものも含め見つけたものはすべてとってしまう「クリーンコロン」という治療戦略が出てきています。確かにみつけしだいすべて取ってしまうと、その後の人生で大腸癌になる確率も大腸内視鏡検査を行う頻度も少なくなりま



す。先輩である千葉胃腸科の千葉裕樹先生や弘前総合医療センターの先生方がそういった治療を積極的に行っています。当院では切除を行うには時間的な制約が大きく(治療に入ってしまうと他の患者さんを待たせてしまう)、また切除した後の出血に対する対応が不十分(夜間や時間外は対応できる看護師が少ない)になってしまうおそれがありました。そのため今後は検査だけに集中し、切除は弘前総合医療センターに依頼する方針としました。

卒業文集

清野愛

こんにちは！ 清野愛です！ 私は18歳の時に沢田内科に就職しました。4月で24歳になります！ 時の流れは速いですね～

私は男女の双子で生まれ、仲よく双子揃って高校3年間親元を離れ八戸でソフトテニスをしていました。テニスばかりでいざ進路を考えた時、やりたいことが思い浮かば

ずボーッとしている毎日でした。そこでまたママが看護師だったこともあり、当時の担任の先生に「やりたいことがないならとりあえず看護師になって資格を取りなさい」と勧められたのがきっかけでした。

働きはじめた当初は人見知りでも声も小さく不安でいっぱいでしたが、お姉さんや学生の先輩達がいつも側でサポートしてくれたおかげで、学年に1人でも全然寂しさを感じない先輩っ子になって

いました。毎日忙しい中で色々な患者さんと関わらせてもらい、自然と人見知りもなくなり声も出るようになりました。今ではめっちゃめっちゃおしゃべりです。うるさすぎるくらいです!!

准看護師の資格を取得し、注射などできることが増えていくうちに仕事が楽しくなってきました。特に最初は処置の係をしていると、採血や点滴がやりたくてウズウズしていました! しだいに学校よりも仕事の方が楽しくなり、井上さんには「学校に行きたくない～」としょっちゅう言っていたくらい沢田内科の環境も仕事も好きになっていました。高校3年生のとき先生に言われてはじめた看護学生でしたが、今では看護師を目指してよかったと胸を張って言えます!!! 資格試験が近づくと、そのたびに休日や忙しい中でも先輩が付きっきりで勉強をサポートし、応援してくれたので嫌いな勉強も試験本番も頑張れました!! 合格発表の日には受験番号01079ちゃんとありました(^)

知っている方もいると思いますが、実は～～～沢田内科に私の母も看護師で勤務しています(笑)



顔も似ているので今思い浮かんだ看護師が母です。正解です!

母は開院当初から沢田内科に勤務しているの、沢田内科には私が生まれた時から知っている職員も多く、小学生の時、現師長の美紀子さんの膝の上で、のんきにダブルピースなんてしちゃっている写真もありますv(^)v 同じ職場に母がいる中で指導じらい面もあったと思いますが、5年間くじけそうになったり、「学校イヤ～!」ってなっても続けてこられたのは忙しいけれど明るい職場や優しいお姉さん、大好きな

先輩や、くっついてくる後輩たちのおかげです!!

4月からは弘前大学医学部附属病院で看護師として新たなスタートをきります。ずっと変わらない私の『辛くても笑顔でいれば必ずいいことがある』をモットーに私らしく笑顔で沢田内科での学び、患者さんとの関わりから得た学びを活かして頑張ります!



5年間ありがとうございました～ (^_^)/♡



弘前総合医療センター大熊洋揮院長が東奥文学賞大賞 (澤田美彦)

今年の元日の朝、いつものように新聞を広げていると、東奥文学賞の記事がありました。今年の日野洋三という人が「漆花に捧ぐ」という題名で受賞。日野洋三、あれっ？ 写真は大熊先生に似ている。よく見ると、日野洋三は弘前総合医療センター院長の大熊洋揮先生その人でした。

その瞬間、私の頭の中には高校時代の友人の姿が浮かんできました。かなり前の話になりますが、東奥日報には10枚小説という文学賞がありました。私の友人は、この10枚小説に「りんごを買った日」という題名で応募し入賞したことがあるのです。

仙台の大学を卒業した後、横浜市の自宅から電車で川崎市に通勤していました。その友人が、仕事が終わり横浜駅から自宅に歩いていると、何と無意識のうちりんごを買って手に持っているのに気がついたのです。りんご農家の息子である自分がりんごを買ってしまった。この感覚は私にはよく分かります。故郷を離れて10年あまり、自分の心も故郷を離れてしまった、津軽はもう遠い存在になってしまった。それを「りんごを買った日」と題して書いたのです。

『天津風 雲の通ひ路吹き閉ぢよ 乙女の姿しばしとどめむ』

この友人が私に教えてくれた僧正遍昭の和歌です。この頃の私は国語の勉強は試験があるからやっているようなものでした。しかし、私の友人はこの和歌を例に出して、人の気持ちを伝えるのにいかに言葉が大事かということ私に教えてくれたのです。五七五七七、たった31文字で何と繊細な人の気持ちを表現できることか。

友人と同時に津軽塗職人だった私の叔父のことも頭に浮かんできました。結婚記念に叔父から津軽塗の箸を2膳もらいました。今年の元日の朝も、その箸でご飯を食べながら新聞を読んでいました。まったく艶を失い傷ついた45年前にももらった津軽塗の箸です。津軽塗には思い入れが強いので叔父の姿がすぐに浮かんできたのです。

さて、脳外科医である大熊先生が小説を書いていることな

どまったく知りませんでした。そして津軽塗に弟子入りしていたことももちろん知りませんでした。その理由が、何か生きた証を残したいとのこと。大熊先生は大学教授としてたくさんの優秀な脳外科医を世の中に送り出しています。明治から昭和初期の政治家で医師でもある後藤新平という人がいます。その後藤新平が、「金を残して死ぬのは下だ、事業を残して死ぬのは中だ、人を残して死ぬのが上だ」という名言を残しました。これに従うと大熊先生はもう生きた証を残していることとなります。

それでも生きた証を残す目的で数年前から小説を書き始めたようです。令和3年7月、大熊先生は弘大教授から国立弘前病院院長として移動しています。その忙しい時期に津軽塗に弟子入りし、弟子入りして8ヶ月後に師匠が亡くなったことを契機に「漆花に捧ぐ」を書き始めていたのです。

「漆花に捧ぐ」は、いわゆる津軽の馬鹿塗といわれる津軽塗の技法が誕生するまでの秘話を、史実に基づき、もちろん大熊先生の創作を織り交ぜて書いた歴史小説です。約300年前の江戸時代。塗師の池田源太郎が献身的な家族に支えられながら厳しい修行を行い、ついに独創的な塗の技法にたどり着いた道のりを小説として完成させたのです。

「漆花に捧ぐ」を読んでいると、すごく細かい歴史的な事実を調べ上げたに違いない、いろいろな根拠を求めて書いたに違いない、そして人物を設定し、構想をどんどん広げて行った、大変な作業だったのだろうなと思いました。「下地塗りと研ぎの作業を計三回繰り返した」、「研ぎにより下塗りの漆を表出させる」、「漆は湿気により乾燥硬化するため、中塗り以降の段階では濡れ手ぬぐいを敷き詰めた三坪ほどの漆風呂に置く」。漆に詳しくなければ書けないことは明白です。

2月18日には東奥日報社で大賞の贈呈式がありました。私はそこで来賓を代表して祝辞を述べてきました。小説を書く大熊先生はご家族からは冷たい視線を感じていたようです。贈呈式にはお嬢さんが出席しました。「漆花に捧ぐ」は東奥日報社からこの夏にも出版されます。

